

自閉症傾向が自己効力感および友人関係を介して 大学生生活満足度に及ぼす影響

佐 藤 祐 基
渡 邊 舞

自閉症傾向が自己効力感および友人関係を介して 大学生生活満足度に及ぼす影響

佐藤 祐基 渡邊 舞
Yuki SATO Mai WATANABE

目次

- I. 問題
- II. 方法
- III. 結果
- IV. 考察
- 引用文献

〔Abstract〕

Effects of Autistic Tendencies on University Life Satisfaction as Mediated by Self-efficacy and Friendship

We examined the effects of autistic tendencies on university life satisfaction by analyzing generalized self-efficacy and relationships with friends. The subjects were 275 university students. Autistic tendencies were shown to affect the degree of university life satisfaction as expressed through generalized self-efficacy and relationships with friends (making new friends, satisfaction with friendships, and friends' demands). Among women, greater autistic tendencies were correlated with difficulty in forming a group of friends, thereby apparently lowering university life satisfaction. It also appeared that women with greater autistic tendencies faced more difficulty in making close friends as they avoided becoming too socially involved. However, for men, autistic tendencies were not directly correlated with making close friends and forming a group of friends. It appeared that men with greater autistic tendencies had reduced self-efficacy which in turn made it difficult for them to form close friendships or a group of friends, thereby lowering university life satisfaction.

I. 問題

障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（通称：障害者差別解消法）が2016年4月に施行されてから、大学における発達障害をもつ学生への学内支援が以前にも増して注目を集めるようになってきている。福田（2016）によると、入学前は診断されずゼミ、サークル、就職活動など複雑な人間関係での困難、こだわりや感覚過敏から大学で初めて自閉スペクトラム症を疑う学生が急増しているという。

大学生の自閉スペクトラム症について

自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder）^{注1)}の主な症状として「社会的コミュニケーションの障害」および「限定された反復的な行動様式」がある（American Psychiatric Association, 2013）。社会的コミュニケーションの障害は、例えば人間関係を発展させ、維持し、理解することなどに欠陥があるとされる。また、限定された反復的な行動様式には、さまざまなこだわりや感覚過敏などが含まれる。例えば習慣への頑なな

キーワード：自閉症傾向, 自己効力感, 友人関係
Key words: autistic tendencies, self-efficacy, friendship

こだわりをもつ場合には、小さな変化に対する極度の苦痛や、思考の柔軟性のなさとして現れることがある。独自の強いこだわりが他者にとって理解し難い場合には、人間関係の継続に問題が生じることもあるだろう。DSM-5によると、自閉スペクトラム症の一般人口における有病率は1%とされる(American Psychiatric Association, 2013)。

独立行政法人日本学生支援機構(2018a, 2018b, 2018c)による調査では、大学(大学院、専攻科含む)に在籍する学生のうち、自閉スペクトラム症の診断を受けた者は、2014年度:1,674人、2015年度:2,017人、2016年度:2,285人、2017年度:2,746人と、年々増加しており^{注2)}、2017年度の在籍率は約0.09%であった。また、診断書はないものの自閉スペクトラム症があると推察され教育上の配慮が行われている学生は2017年度:1,557人であった。上記の診断を受けた学生と合わせると在籍率は約0.14%である。これらの報告から、大学が把握している自閉スペクトラム症の診断を受けている学生および疑いのある学生は、年々増加傾向にあるが、一般人口の有病率と比べると、在籍率はかなり低い割合であることがわかる。

一方、若林・東條・Baron-Cohen・Wheelwright(2004)は、自閉症スペクトラム指数日本語版の調査結果において、一般の大学生の中にカットオフポイント(臨床群と健常群を識別する値)を上回る高い自閉症傾向を有するものは、2.8%在籍していると報告している。こうしたことから、診断はなくとも自閉症傾向を色濃くもつ学生は大学が把握している人数より多く存在し、対人関係上の困難を抱えながら、大学生生活を過ごしている可能性があると考えられる。

自閉スペクトラム症と友人関係

自閉スペクトラム症をもつ学生は、相手の表情や意図を読み取ったり、場の空気を読んだりすることが難しく、対人場面における困

難を抱えやすい(杉山, 2002)。独立行政法人日本学生支援機構(2019)によると、自閉スペクトラム症をもつ学生は、良好な対人関係の構築が難しいため、同学年の集団から孤立する場合があること、また、他者の表情や感情などの読み取りが難しいため、場にそぐわない発言や周囲の人の気分を害する言動をしてしまう場合があることが指摘されている。岩田(2011)は、自閉スペクトラム症をもつ学生の事例として、友人とのかかわりを拒否して授業内でのペアワークなどができない、友人に理不尽と誤解される言動をすることでトラブルになってしまう、異性関係をめぐりストーカー扱われる等のケースを紹介している。また、DSM-IV-TRによると、アスペルガー障害をもつ人は、いじめを受ける可能性があり、対人的孤立などを通じて、青年期に抑うつや不安が発現する場合があるという(American Psychiatric Association, 2000)。若林ら(2004)は、健常な大学生群の中で、自閉症スペクトラム指数日本語版の得点がカットオフポイントを上回った者の多くが、友人関係にあまり関心をもっておらず、高校卒業までに孤立やいじめなどの社会的コミュニケーション上の問題があったことを報告している。

このように、自閉スペクトラム症をもつ学生または自閉症傾向の高い学生は、友人関係における失敗が多くなりがちで、親友や友人グループを獲得しづらい状況が様々な報告から見受けられる。また、失敗経験の多さから、友人関係に関心を示さなくなる、あるいは回避的になる可能性もあると考えられる。

友人関係と大学生生活満足

則定(2008)は、青年期における重要な他者に対する心理的居場所感を検討し、青年期を通じて、学校段階に関係なく一貫して親友が重要であることを指摘している。石本(2010)は、大学生において、ありのままの自分でいられること、誰かの役に立っている

と思えることによって居場所感をもつことができるとし、他者との関係性の中での居場所感の高さが学生生活への適応に影響することを指摘している。高倉・新屋・平良(1995)は、大学生の友人をはじめとした対人関係への満足感と、生活全体の満足感との間に正の相関があること、また対人関係への満足感と抑うつとの間には負の相関があることを明らかにしている。さらに、大学生の大学への適応に関する研究の中で、大学生生活に満足を得ることに関して、自分の身近にいてくれる友人との関係性の形成が重要であることが指摘されている(吉田・橋本・安藤・植村, 1999; 植村・小川・吉田, 2001)。

上記から、大学生にとっては友人関係の満足感が、大学生生活の満足度を高めるひとつの要素となっていることが窺える。自閉症傾向を高くもつ学生の場合は、友人関係の満足度が低下することで、大学生生活の満足度もあわせて低下することが予想される。

自閉症傾向と友人関係の性差

自閉スペクトラム症は、男性の方が女性よりも4倍多く診断されており、その理由として女性は社会的コミュニケーションの困難の表れがより軽微なためではないかと指摘されている(American Psychiatric Association, 2013)。山内・宮尾・奥山・井田(2013)は、アスペルガー障害の女兒は、思春期になり、不注意症状や心身症、適応障害に至ってから病院を受診することが多いことを報告している。砂川(2015)は、自閉スペクトラム症の女性は「努力と失敗の繰り返し」を通じて「社会適応のスキルを学習」するために、周囲が認識しがたくなることを指摘している。若林ら(2004)によると、大学生では男性が女性よりも自閉症傾向の得点が高いことが示されている。

他方、大学生の友人関係についても、性差があることが様々な研究から明らかにされている。例えば、和田(1993)によると、大

学生において男性は女性よりも一緒に行動するという「共行動」を重視し、女性では男性よりも悩みを打ち明けるといった「自己開示」や、互いに甘えられるといった「相互依存」を重視するという。また、榎本(2000)は、女性の方が男性よりも友人との共有・協調の関係の中で、互いに求めるものが強くなる傾向があることを指摘している。

このように、自閉症傾向や友人関係について検討する際には、性差に着目する必要があると考えられる。

自閉症傾向と自己効力感

本田(2017)は、自閉スペクトラム症の特性だけでは必ずしも社会不適応を生じないか、あるいは社会適応にむしろ有利な場合もあると述べている。大学生が自閉スペクトラム症の特性を有していても、友人関係や大学生活において大きな問題を生じず、むしろ適応的に過ごし卒業する場合もあると考えられる。そのような学生は、自閉スペクトラム症の特性を補うようなパーソナリティ特性を有している可能性があると考えられる。自閉症傾向や友人関係に関連するパーソナリティ特性として、本研究では特性的自己効力感に着目したい。成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995)によると、特性的自己効力感(generalized self-efficacy)とは、具体的な個々の課題や状況に依存せずに、より長期的に、より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感のことであり、ある種の人格特性的な認知傾向とみなすことが可能であるとされている。井上・松壽・大宮・傳田(2017)による北海道全域の小中高生を対象とした調査において、自閉症傾向と特性的自己効力感の間に有意な負の相関関係($r = -.47$)が認められ、自閉症傾向が高い生徒ほど、特性的自己効力感が低下しやすくなる傾向があることが示されている。

自己効力感と友人関係

自己効力感は有益な人間関係を形成する

要因であることが指摘されている (Leary & Atherton, 1986; Bandura, 1997)。例えば、社会的な自己効力感は、対人関係に関するソーシャルサポートを促進し、抑うつ傾向を低下させることが明らかにされている (Holahan & Holahan, 1987)。また、社会的な自己効力感が高い青年は、良好な友人関係を形成しやすいことが指摘されている (Connolly, 1989)。成田ら (1995) の特性的自己効力感尺度には、友人関係に関する項目が含まれているため、友人関係は日常場面における特性的自己効力感の構成概念の一部を成していることが窺える。

本研究の目的

本研究では、自閉症傾向が特性的自己効力感および友人関係を介して、大学生生活満足度に及ぼす影響について検討することを目的とする。この目的を検討するために仮説モデルを設定した (Figure 1)。さらに、自閉症傾向および友人関係には性差があるとされるため、このモデルに関して性差を検討する。

なお、自閉スペクトラム症の症状は、生来的な脳の機能障害に由来するため、特定の介入によって症状が消滅することはなく、不変性がある。一方で、自己効力感は、Bandura (1997) によって、向上のための4つの情報源が示されており、変容可能な点に特徴がある。このことから、自閉症傾向が特性的自己効力感に影響を与えるモデルを想定した。

Ⅱ. 方法

調査協力者と調査時期

調査協力者は北海道内の大学生309名であった。本論文では、回答に不備のなかった275名 (男性113名、女性162名; 平均年齢19.00歳 ($SD = 1.22$)) を分析対象とした。2017年7月に心理学の講義内で質問紙調査を行った。

倫理的配慮

調査の実施に際し、研究の目的・方法、個人情報保護の方法、データの保管方法、研究上のリスク、自発的参加の原則、途中での辞退の機会保証について、紙面および口頭で説明し、調査への協力に同意する者だけに回答してもらった。

測定尺度

大学生生活満足度・友人関係満足度

大学生生活満足度 (入学してからの大学生活に満足しているか) および友人関係満足度 (現在の友人関係に満足しているか) について5段階 (1. 満足していない～5. 満足している) で回答してもらった。

自閉症スペクトラム指数日本語版

Baron-Cohen, Wheelwright, Skinner, Martin & Clubley (2001) は健常範囲の知能をもつ成人の自閉症傾向を測定できる尺度として自閉症スペクトラム指数を作成した。本研究では若林ら (2004) がその日本語版として作成した「自閉症スペクトラム指数日本語版 (Autism-Spectrum Quotient; AQ)」50項目を用いた。AQには「社会的

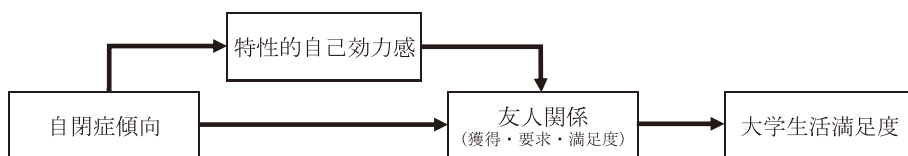


Figure 1 本研究の仮説モデル

スキル」「注意の切り替え」「細部への注意」「コミュニケーション」「想像力」の5領域(各10項目)による内容が含まれている。項目の内容に対して4段階「1. あてはまらない～4. あてはまる」で評定してもらった。

特性的自己効力感尺度

成田ら(1995)が作成した「特性的自己効力感尺度(Generalized Self-Efficacy Scale:SE尺度)」23項目を用いて、5段階「1. そう思わない～5. そう思う」で評定してもらった。

友人獲得尺度

小塩(1999)の「友人獲得尺度」10項目を用いて、4段階「1. そう思わない～4. そう思う」で評定させた。この尺度は「親友の獲得(5項目)」と「所属集団の獲得(5項目)」の2側面が含まれている。

友人への要求尺度

小塩(1999)の「友人への要求尺度」12項目を用いて、4段階「1. してほしくない～4. してほしい」で評定させた。この尺度は、普段の友人つきあいの中で、友人にどのように振る舞ってほしいかを問うもので、小塩はこの項目から「理解・評価欲求(4項目)」「関与欲求(4項目)」「過剰関与回避欲求(4項目)」の3因子を抽出している。

なお調査では、岡田(1993)の友人関係尺度より22項目を抜粋した項目も測定したが、本論文では使用しないため詳細を割愛する。

上記の尺度から得られたデータの分析には、IBM SPSS Statistics 23, およびIBM Amos 23を用いた。

Ⅲ. 結果

分析に用いる変数について

AQは、若林ら(2004)の得点化の方法にしたがい、50項目の合計点を算出した。また、AQの下位尺度である「社会的スキル」「注意

の切り替え」「細部への注意」「コミュニケーション」「想像力」の5領域別の合計得点も算出した。SE尺度についてはその一次元性が確認されていることから23項目の合計点を算出した。友人獲得尺度および友人への要求尺度の因子構造を確認するために、それぞれ主因子法・Promax回転による因子分析を行い、下位尺度得点を分析に用いた。友人獲得尺度は、「親友の獲得」($\alpha = .92$)、「所属集団の獲得」($\alpha = .90$)の2因子を抽出した。友人への要求尺度は、「理解・評価・関与欲求」($\alpha = .85$)、「過剰関与回避欲求」($\alpha = .73$)の2因子を抽出した。

自閉症スペクトラム指数のカットオフポイントを用いた検討

AQのカットオフポイントについては、若林ら(2004)による33点以上とする基準、栗田・長田・小山・金井・宮本・志水(2004)による30点以上とする基準、さらにWoodbury-Smith, Robinson, Wheelwright & Baron-Cohen(2005)による26点以上の基準が存在する。これらの基準を参考に、カットオフポイント以上の割合を算出したところ、275名の協力者のうち、AQ33点以上は5名(1.8%)、30点以上は26名(9.5%)、26点以上は73名(26.5%)であった。本研究では、AQ25点以下を「自閉症傾向低群(202名)」, AQ26点以上を「自閉症傾向高群(73名)」とした。

自閉症傾向の高低によって、特性的自己効力感、友人関係の各変数、大学生生活満足度の差異を検討するために、AQの得点群を被験者間要因とし、各変数を従属変数とする1要因の分散分析を行った(Table 1)。その結果、特性的自己効力感では、AQ得点群の有意な主効果がみられ($F(1,273) = 32.90, p < .001$)、AQ高群の得点が低群の得点よりも有意に低かった。友人獲得尺度の2因子において、AQ得点群の有意な主効果がみられ、「親友の獲得」($F(1,273) = 17.69, p < .001$)および「所属集団の獲得」($F(1,273)$

Table 1 自閉症傾向「低群」と「高群」における各変数の平均値とSD

	特性的自己効力感	友人獲得尺度		友人への要求尺度		友人関係満足度	大学生生活満足度
		親友の獲得	所属集団の獲得	理解・評価・関与欲求	過剰関与回避欲求		
自閉症傾向低群 (AQ ≤ 25)	70.30 (12.23)	16.03 (3.90)	15.76 (4.05)	21.67 (4.76)	8.68 (2.51)	4.11 (0.93)	3.72 (1.00)
自閉症傾向高群 (AQ ≥ 26)	61.10 (10.21)	13.77 (4.00)	13.05 (4.15)	21.81 (5.20)	10.30 (2.74)	3.67 (0.91)	3.40 (1.12)
全体	67.86 (12.39)	15.43 (4.05)	15.04 (4.12)	21.71 (4.87)	9.11 (2.67)	4.00 (0.95)	3.64 (1.04)
F値	32.90***	17.69***	25.15***	0.04	21.34***	12.23**	5.31*

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

= 25.15, $p < .001$) では, AQ低群は高群よりも有意に得点が高く, 親友を獲得している, また友人グループに所属しているという認識が高かった。友人への要求尺度では, 「過剰関与回避欲求」において, AQ得点群の有意な主効果がみられ ($F(1,273) = 21.34$, $p < .001$), AQ高群の得点が低群よりも有意に高く, 友人からの過剰な関与を回避する欲求が高かった。友人関係満足度において, AQ得点群の有意な主効果がみられ ($F(1,273) = 12.23$, $p < .01$), AQ低群は高群よりも有意に得点が高く, 友人関係への満足度が高かった。大学生生活満足度においても, AQ得点群の有意な主効果がみられ ($F(1,273) = 5.31$, $p < .05$), AQ低群は高群よりも有意に得点が高く, 大学生生活への満足度が高かった。

以上から, AQ高群は特性的自己効力感, 友人関係の各指標および大学生生活満足度において, AQ低群との間に差が認められた。AQ高群の人数がやや少なかつたため, 本研究では以降の分析を全協力者のデータを用いて行うこととする。

各変数間の相関分析

各変数間の関連を検討するために, ピアソンの積率相関係数を算出した (Table 2)。自閉症傾向は, 特性的自己効力感, 親友の獲得, 所属集団の獲得, 友人関係満足度, 大学生生活満足度と有意な負の相関が認められ, 友人への過剰関与回避欲求と有意な正の相関が認め

られた。特性的自己効力感, 親友の獲得, 所属集団の獲得, 友人関係満足度, 大学生生活満足度と有意な正の相関が認められ, 過剰関与回避欲求と有意な負の相関が認められた。

次にAQの5領域と他の変数の関連を検討するためピアソンの積率相関係数を算出した (Table 3)。「社会的スキル」は特性的自己効力感, 親友の獲得, 所属集団の獲得, 理解・評価・関与欲求, 友人関係満足度, 大学生生活満足度と有意な負の相関がみられ, 過剰関与回避欲求と有意な正の相関がみられた。「注意の切り替え」は特性的自己効力感, 所属集団の獲得, 大学生生活満足度と有意な負の相関がみられた。「コミュニケーション」は特性的自己効力感, 所属集団の獲得と有意な負の相関がみられ, 過剰関与回避欲求と有意な正の相関がみられた。「想像力」は特性的自己効力感と有意な負の相関がみられ, 過剰関与回避欲求と有意な正の相関がみられた。「細部への注意」は各変数との有意な相関がみられなかった。

仮説モデルに対するパス解析

仮説モデルに従い, 自閉症傾向が特性的自己効力感および友人関係を介して大学生生活満足度に及ぼす影響を検討するため, 共分散構造分析を行ったところ, 十分な適合度が示された (Figure 2)。

その結果, 自閉症傾向は特性的自己効力感に負の影響を与えていた。その後, 特性的自己効力感, 親友の獲得と所属集団の獲得に正

Table 2 各変数間の関連性 (相関係数)

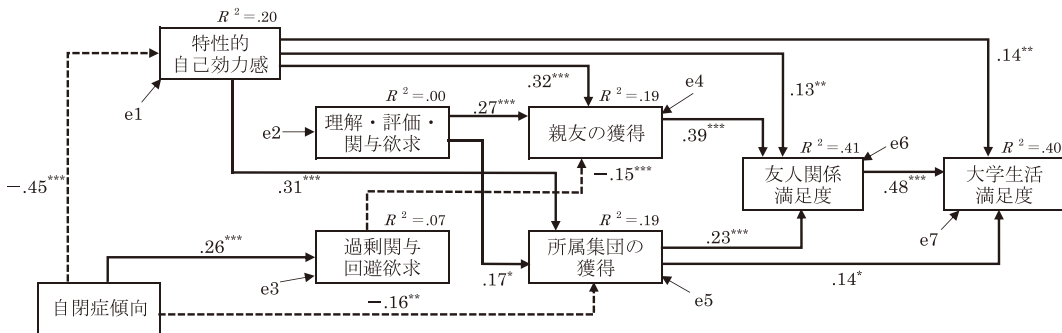
	自閉症傾向	特性的自己効力感	友人獲得尺度		友人への要求尺度		友人関係満足度
			親友の獲得	所属集団の獲得	理解・評価・関与欲求	過剰関与回避欲求	
特性的自己効力感	-.45**						
親友の獲得	-.22**	.35**					
所属集団の獲得	-.32**	.38**	.74**				
理解・評価・関与欲求	-.03	.04	.25**	.20**			
過剰関与回避欲求	.25**	-.20**	-.20**	-.13*	.25**		
友人関係満足度	-.20**	.35**	.62**	.58**	.09	-.21**	
大学生生活満足度	-.18**	.36**	.39**	.47**	.03	-.08	.61**

** $p < .01$ * $p < .05$

Table 3 自閉症傾向5領域と各変数の関連性 (相関係数)

	自閉症傾向合計	特性的自己効力感	友人獲得尺度		友人への要求尺度		友人関係満足度	大学生生活満足度
			親友の獲得	所属集団の獲得	理解・評価・関与欲求	過剰関与回避欲求		
A								
Q								
5								
領域								
社会的スキル	.71**	-.49**	-.33**	-.42**	-.13*	.19**	-.27**	-.18**
注意の切り替え	.61**	-.34**	-.11	-.21**	.08	.07	-.09	-.15*
細部への注意	.27**	.11	-.03	-.06	-.00	.04	-.01	-.05
コミュニケーション	.74**	-.35**	-.10	-.16**	.04	.18**	-.09	-.10
想像力	.55**	-.19**	-.04	-.05	-.04	.24**	-.09	-.01

** $p < .01$, * $p < .05$



$\chi^2(12) = 18.76, n.s., GFI = .98, AGFI = .95, CFI = .99, RMSEA = .05$ 誤差分散: $e2 \leftrightarrow e3$ (.27), $e4 \leftrightarrow e5$ (.68)
 有意なパスのみ掲載した (***) $p < .001$, (**) $p < .01$, (*) $p < .05$). 実線は正の係数, 破線は負の係数を表す。

Figure 2 自閉症傾向が自己効力感と友人関係を介して大学生生活満足度に及ぼす影響のパス解析の結果

の影響を与えていた。また、自閉症傾向は過剰関与回避欲求に正の影響を与え、過剰関与回避欲求は親友の獲得に負の影響を与えていた。さらに、自閉症傾向は所属集団の獲得に負の影響を与えていた。友人関係満足度は特性的自己効力感、親友の獲得および所属集団の獲得から正の影響を受けていた。大学生生活満足度は特性的自己効力感、所属集団の獲得および友人関係満足度から正の影響を受けていた。

性差の検討

各変数の性差を検討するために、性を被験

者間要因とし、各変数を従属変数とする1要因の分散分析を行った (Table 4)。その結果、自閉症傾向では性の有意な主効果がみられ ($F(1,273) = 6.40, p < .05$)、男性の得点が女性の得点よりも有意に高かったが、その他の特性的自己効力感、友人関係の指標および大学生生活満足度の得点には性差はみられなかった。

次に、Figure 2のモデルを使用し、性差を検討するために多母集団同時分析を行った。等値制約を置かないFigure 3のモデルが最も高い適合度を示した。多母集団同時分

析の結果、男性では、自閉症傾向が特性的自己効力感に負の影響を与え、その後、親友の獲得と所属集団の獲得に影響を与えていた。さらに所属集団の獲得が友人関係満足度を経由して、大学生生活満足度に影響を与えるパスが確認された。また男性の場合、自閉症傾向は過剰関与回避欲求に正の影響を与えてはいるが、その後、友人関係を経由して、友人関係満足度や大学生生活満足度に及ぼす影響は認められなかった。

一方、女性では、自閉症傾向が特性的自己効力感に負の影響を与え、親友の獲得および友人関係満足度を経由して大学生生活満足度に影響を与えていたが、特性的自己効力感から所属集団の獲得に及ぼす影響はみられなかった。また自閉症傾向は過剰関与回避欲求に正の影響を与え、過剰回避欲求を経由して親友

獲得に負の影響を与えていた。その後、親友獲得は友人関係満足度に、友人関係満足度は大学生生活満足度にそれぞれ正の影響を与えていた。また、自閉症傾向は、所属集団の獲得に負の影響を与え、所属集団の獲得は友人関係満足度と大学生生活満足度にそれぞれ正の影響を与えていた。

さらに男性の場合、特性的自己効力感は直接、大学生生活満足度に正の影響を与えていた。女性の場合、特性的自己効力感は直接、友人関係満足度に正の影響を与えていた。

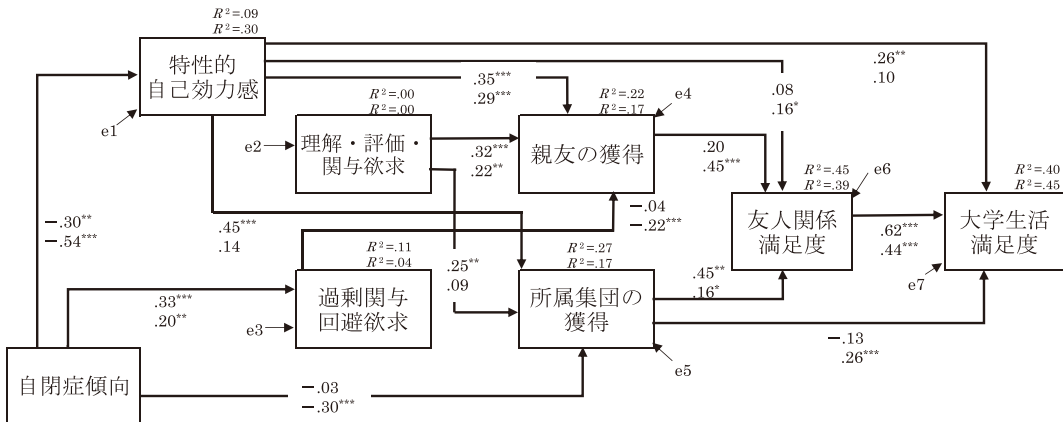
IV. 考 察

本研究の目的は、自閉症傾向が特性的自己効力感および友人関係を介して、大学生生活満足度に及ぼす影響を検討すること、さらに性

Table 4 男女別の各変数の平均値とSD

	自閉症傾向	特性的自己効力感	友人獲得尺度		友人への要求尺度		友人関係満足度	大学生生活満足度
			親友の獲得	所属集団の獲得	理解・評価・関与欲求	過剰関与回避欲求		
男性	22.88 (5.52)	67.57 (12.59)	15.22 (4.05)	14.81 (4.27)	21.89 (5.33)	9.37 (2.66)	3.96 (1.02)	3.66 (1.04)
女性	21.04 (6.21)	68.06 (12.29)	15.58 (4.06)	15.20 (4.01)	21.57 (4.54)	8.93 (2.66)	4.02 (0.89)	3.62 (1.05)
F値	6.40*	0.10	0.54	0.58	0.29	1.87	0.35	0.13

* $p < .05$



$\chi^2(24) = 1.44, n.s., GFI = .99, AGFI = .91, CFI = .99, RMSEA = .04$
 誤差分散: e2↔e3 (男性.35, 女性.23), e4↔e5 (男性.68, 女性.83)
 有意なパスのみ記載した (***) $p < .001, **p < .01, *p < .05$). 数値は上段が男性, 下段が女性の値を示す。

Figure 3 多母集団同時分析の結果

差について検討することであった。

自閉症傾向の高さの特徴を明らかにするために、AQ得点をカットオフポイントで高低群にわけ、特性的自己効力感、友人関係および大学生生活満足度の得点を比較したところ、自閉症傾向の高い者（AQ \geq 26）は自己効力感が低く、友人を獲得しているという認知も低く、友人関係および大学生活への満足度も低かった。すなわち自閉症傾向の高い学生は、自閉症傾向が低い学生よりも、日常生活全般にわたる自己効力感が低いこと、友人関係を形成維持していくことが困難であること、友人関係に対する満足度が低いこと、大学生活への満足度を低く評価していることが示唆された。

自閉症傾向が特性的自己効力感および友人関係を介して、大学生生活満足度に及ぼす影響について検討するために、Figure 1の仮説モデルについてパス解析を行った。このモデルに関して十分な適合度が得られたことから、本研究の仮説モデルは支持された。

自閉症傾向が高い者ほど、特性的自己効力感が低下しやすくなる傾向が示されたことは、井上ら（2017）の報告を支持するものである。社会的スキルやコミュニケーションなどの問題から、日常生活全般にわたって自己効力感が低下するものと考えられる。また、自閉症傾向の高い人は「口出しをしないしてほしい」「もっと一人にしてほしい」といった友人からの過剰関与を回避する要求が高くなることが示された。若林ら（2004）は、AQでカットオフポイントを上回った学生は、友人関係にあまり関心をもっていないことを指摘しており、自閉症傾向の高い人は友人との間に一定の距離を置きやすい傾向があると考えられる。また、失敗経験の多さから回避的になっている可能性も考えられる。さらに、自閉症傾向は特性的自己効力感を介して友人関係に影響を及ぼすことが明らかになったことから、特性的自己効力感を高めていく働き

かけによって友人関係の改善および大学生活への満足度を高める可能性があると考えられる。

次に、性差が認められた結果について考察していく。自閉症傾向の性差を分散分析によって検討したところ、AQにおける男性の得点が女性よりも有意に高かった。若林ら（2004）の研究でも性差が確認されており、本研究の結果と一致するものであった。

以下、多母集団同時分析の結果について考察する。男性の場合、自閉症傾向が高い人は、特性的自己効力感の低さに媒介されて、友人グループに所属していないという認知が高まり、友人関係と大学生活の不満足に至るのが特徴的である。女性の場合、自閉症傾向が高い人は、特性的自己効力感の低さに媒介されるだけではなく、過剰関与を回避する欲求の高さにも媒介され、その後、親友がいないという認知が高まり、友人関係と大学生活の不満足に至る経路が認められた。また、女性の場合には、自閉症傾向の高さは、直接、所属する友人グループがないという認知を高め、その後、友人関係と大学生活の不満足に至る経路も認められた。つまり、女性の方がより多様な経路が認められたといえる。

男性の場合は、自閉症傾向が高くとも、日常生活全般を通して自己効力感を高く認知して過ごせるようになることによって、多少場の空気が読めない行動を取ったり、コミュニケーションが苦手であったとしても、友人ができやすくなると考えられる。結果として、友人関係に恵まれ、満足のいく大学生活を過ごすことにつながると考えられる。

しかし、女性の場合には、相手の表情や意図を読み取ったり、場の空気を読んで行動することが難しいと、友人グループに所属することが困難になると考えられる。また、男性では友人から過剰に関わられることが苦手であっても友人の獲得には影響しないが、女性では、親友ができづらくなってしまい、結果

として大学生生活の満足度も低いものになってしまうと考えられる。和田（1993）や榎本（2000）が指摘したように、女性では男性よりも心理的距離の近い関係性を求める傾向があるため、自閉症傾向が、友人関係を形成・維持することへの妨げになっていることが考えられる。砂川（2015）は、自閉スペクトラム症の女性は、「努力と失敗の繰り返し」を通じて、「社会適応のスキルを学習」することを指摘しており、本研究の結果からも対人関係に対応する際に求められる社会的スキルやコミュニケーションの水準が男性よりも高いことが窺える。また、女性の場合は、特性的自己効力感を高めることによって、友人グループに加わるまでには至らないかもしれないが、一対一の信頼できる友人関係の形成には至る可能性があると考えられる。親友を作ることが、友人関係の満足感を得ることにつながり、さらには大学生生活の満足感を得ることにつながると考えられる。

自閉症傾向は生来的な脳の機能に由来する特性であるため、介入による改善には限界があるといえる。性別を問わず、特性的自己効力感の向上に、より目を向けることによって、友人関係の問題や大学生生活上の悩みの解決に効果が認められる可能性があると考えられる。

今後の課題

友人関係は同じ大学に所属する学生だけではなく、それ以前の高校や中学からの友人を想定した可能性があることや、同性・異性・恋人についての分類も行わなかったため、今後は属性ごとの傾向について調べる必要があると考えられる。今回は対人関係の中でも、友人関係に焦点を当てたが、他にも大学の教職員との関係や家族との関係、インターネット上の人間関係など、多面的な対人関係について調査することが望ましいと考えられる。

本研究では自閉症傾向と友人関係に関連するパーソナリティ特性として、特性的自己効

力感を用いたが、他にも関連するパーソナリティ特性があると考えられる。

大学生に関連の深い発達障害として、本研究では自閉スペクトラム症を取り上げたが、注意欠如・多動症についても学内で問題となることが少なくない。注意欠如・多動症の傾向の高い学生は、授業への遅刻・欠席が目立ち、レポート課題の未提出や期限内に提出できない、約束を守れないなどの問題行動が続くことによって、友人間に不信感が広がる可能性がある。今後は自閉症傾向だけではなく、注意欠如・多動症傾向についても検証する必要があると考えられる。

〔付記〕

自閉症スペクトラム指数日本語版に関しては、千葉大学の若林明雄教授に使用許可をいただきました。また、北星学園大学社会福祉学部福祉心理学科研究生の岩渕里香さんには文献整理などのご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

〔注〕

- 1) 発達障害者支援法によると、発達障害の分類は、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害」などとされる。このうち「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害」は、DSM-5において「自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害」へと名称の統一がなされている（American Psychiatric Association, 2013）。
- 2) 「発達障害の重複」の項目にも自閉スペクトラム症をもつ者が含まれるが、詳細が不明なため除外した。なお、2017年度は562人に発達障害の重複が認められた（独立行政法人日本学生支援機構, 2018c）。

〔引用文献〕

American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (4th ed., Text Revision). Washington, DC: American Psychiatric Association.
 (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (訳) (2002). DSM-IV-TR精神疾患の

- 診断・統計マニュアル 医学書院)
- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association.
(アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野裕 (監訳) (2014). DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York: W. H. Freeman and Company.
- Baron-Cohen, S., Wheelwright, S., Skinner, R., Martin, J., & Clubley, E. (2001). The Autism-Spectrum Quotient (AQ): evidence from Asperger Syndrome/high-functioning autism, males and females, scientists and mathematicians. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 31, 5-17.
- Connolly, J. (1989). Social self-efficacy in adolescence: Relations with self-concept, social adjustment, and mental health. *Canadian Journal of Behavioural Science*, 21, 258-269.
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2019). 合理的配慮ハンドブック—障害のある学生を支援する教職員のために— ジアース教育社
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2018a). 平成27年度 (2015年度) 障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書 (訂正版) https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afiedfile/2018/07/05/h27report_h30ver.pdf (2019年11月4日)
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2018b). 平成28年度 (2016年度) 障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書 (訂正版) https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afiedfile/2018/07/05/h28report_h30ver.pdf (2019年11月4日)
- 独立行政法人日本学生支援機構 (2018c). 平成29年度 (2017年度) 障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書 https://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/_icsFiles/afiedfile/2018/07/05/h29report.pdf (2019年11月4日)
- 榎本淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.
- Holahan, C. K., & Holahan, C. J. (1987). Self-efficacy, social support, and depression in aging: A longitudinal analysis. *Journal of Gerontology*, 42, 65-68.
- 本田秀夫 (2017). 大人になった発達障害 認知神経科学, 19, 33-39.
- 福田真也 (2016). 大学における学校精神保健 (特集 学校と精神医学 (2)) 精神科治療学, 31, 601-605.
- 井上貴雄・松嵩由莉・大宮秀淑・傳田健三 (2017). 児童・青年期における抑うつ症状, 躁症状, 自閉傾向と自己効力感の関連 第58回日本児童青年精神医学学会総会抄録, 266.
- 石本雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278-286.
- 岩田淳子 (2011). 大学生の発達障害 精神医療第4次, 61, 36-42.
- 栗田広・長田洋和・小山智典・金井智恵子・宮本有紀・志水かおる (2004). 自閉性スペクトル指数日本版 (AQ-J) のアスペルガー障害に対するカットオフ 臨床精神医学, 33, 209-214.
- Leary, M. R., & Atherton, S. C. (1986). Self-efficacy, social anxiety, and inhibition in interpersonal encounters. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 4, 256-267.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—, 教育心理学研究, 43, 306-314.
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達の变化 カウンセリング研究, 41, 64-72.
- 岡田努 (1993). 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8, 1-11.
- 杉山登志郎 (2002). 高機能広汎性発達障害におけるコミュニケーションの問題 聴能言語学 研究, 19, 35-40.
- 砂川芽吹 (2015). 自閉症スペクトラム障害の女性には診断に至るまでにどのように生きてきたのか—障害を見えにくくする要因と適応過程に焦点を当てて— 発達心理学研究, 26, 87-97.

- 高倉実・新屋信雄・平良一彦 (1995). 大学生の Quality of Life と精神的健康について—生活満足度尺度の試作— 学校保健研究, 37, 414-422.
- 植村善太郎・小川一美・吉田俊和 (2001). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (2) —大学生の学習への取り組み, および大学生生活満足感に関連する要因の検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 48, 29-43.
- 和田実 (1993). 同性友人関係—その性および性別役割タイプによる差異— 社会心理学研究, 8, 67-75.
- 若林明雄・東條吉邦・Baron-Cohen, S・Wheelwright, S. (2004). 自閉症スペクトラム指数 (AQ) 日本語版の標準化—高機能臨床群と健常成人による検討— 心理学研究, 75, 78-84.
- Woodbury-Smith, M. R., Robinson, J., Wheelwright, S., & Baron-Cohen, S. (2005). Screening Adults for Asperger Syndrome Using the AQ: A Preliminary Study of its Diagnostic Validity in Clinical Practice. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 35, 331-335.
- 山内裕子・宮尾益知・奥山真紀子・井田博幸 (2013). 女兒 Asperger 障害の臨床的特徴 脳と発達, 45, 366-370.
- 吉田俊和・橋本剛・安藤直樹・植村善太郎 (1999). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 46, 75-98.